

## カウンターの中の物語

BARを経営しています。長年営業をしていると老若男女問わず様々なお客様と出会います。お客様だけではなく、色々なスタッフ達とも。学生、サラリーマン、主婦、これから自分で飲食店を起ち上げたい人など。今回はその中の一人の女子大学生のスタッフとの話しをしたいと思います。

その女性は大学2年生の時に当店で働きました。とても明るくいつも笑顔で人気もありお客様からも「今日〇〇ちゃんはいないの？」と聞かれる事もしょっちゅうでした。自分も一緒に働いていてかなりの部分で助けられたものでした。そして1年たった頃でした。ある出来事で自分とその学生とで大ゲンカになったのです。お客様が帰ってから1時間ほど話し合い、お互いの思い考えをぶつけ合いなんとか仲直りしました。

時が流れ大学卒業を向かえる時期が近づきバイトを辞める日がきました。最終日は数多くのお客様が顔を出してくれて、その学生の人気ぶりをあらためて実感したものでした。店を閉店し後片付けも終わり、「お疲れ様でした。今までありがとうございました」とお互いに挨拶を済ませたあとに、一通の手紙を差し出し「私が帰ったあとに読んでくださいね」と言って店をあとにしました。

誰もいない店内で手紙を読むと、「長年大変お世話になりました。～中略～マスターとケンカした事を覚えていますか？あの時、マスターは本気で怒りましたね。今までのバイト先では失敗しても何をして相手からは、若いから、学生だから、と言われてきました。甘えてました。でもマスターだけは一人の大人として向き合ってくれた気がしたのです。それが時間がたつと嬉しくなってきたんですよ。～省略～」その後もまだまだ文章は続いていました。それを読んだあと嬉しくもあり、店内を見回すとこの店ってこんなに広がったっけ、と淋しくも感じたものです。

それから2年たった頃に突然男性と2人で店に訪ねて来たのです。「久しぶり～マスター、私この人と結婚したんですよ。マスターにはラインやメールじゃなく直接伝えたくて来ました～」。おっ!!しっかり者になったなあと思ってると、「だからお祝いちょうだい」。しっかり者なんだかちゃっかり者なんだか。

それから少し3人で談笑していると、「私、研究職から営業職に変えてもらったんです。マスターと一緒に働いてて、お客様とのつながりが楽しかったんですよ。働いてうちに、やりたい事と何か違うなって思ったから、変えてもらいました」。それを聞いて思いました。自分と職場とお客様を通して、この女性も成長したんだなあ。

これも職業奉仕物語の一つなんだと。